

巻頭言

断層映像研究会について思うこと

古屋 儀郎

第22回断層映像研究会は、平成5年9月28日、29日の2日間にわたって笹川記念会館においてお世話させていただきましたが、200名以上の参加者をえて、盛会裡に終了いたしました。此の度は前回の安河内会長の企画にならしまして、教育講演を多数の先生方をお願いいたしました。予想をこえて一般演題数53題と多く、大変過密ダイヤになった感があります。御協力いただきました会員の先生方に深く感謝申し上げます。

本研究会は皆様御存じの通り、昭和48年2月に松川先生を代表世話人として福島、飯坂温泉で第1回が開催されております。従って日医放学会の研究会としては最も長い歴史をもつものですし、その成果は計り知れないものがあります。その後、CT、超音波、MRI、SPECT、PET等々が広く臨床応用されるようになり、第17回（昭和63年）から断層映像研究会と名称が改められました。しかし、近年一般演題数、参加者の減少傾向にありますことは、本研究会の発展に関して憂慮するものであります。専門領域別の各種研究会が多数発足し、そちらへの研究発表の方が勉強になると考える人々が増えたことも大きな原因と考えられます。先の望月先生を会長として開催されました秋季大会に於いて「放射線診療の分化と統合を考える」と題してラウンドテーブルディスカッションがあり、小生も本研究会の現況についてお話ししたし、高橋先生から熊本の研究会での討論の大約を話されました。大勢は本研究会が診断部会での主力となって発展していくことが望ましく、他の関連研究会、秋季臨床大会などと考え合わせて日医放

の診断部会に統一することが望ましいとの意見であったと伺いました。今後、益々研究会は増加し、その統合は容易でないのではないかとこの印象を強くもちました。日医放の委員会でも各研究会に関するアンケート調査を行い、種々検討されていると伺っておりますが、日本画像医学会との関連も考慮し何とか会員の納得する一歩前進した良い成果がえられることを願っております。

そこで、本研究会についてのみ1~2申し上げますと、先ず会員数の増加をはからなければなりません。この件につきましては色々御意見があることも聞き及んでおりますが、断層映像に関与する医師は勿論のこと、物理学者、技術者と共に診療放射線技師の入会をはかり、臨床研究と共に基礎的問題の研究発表の場を広げる努力をしては如何でしょうか。本研究会の目的にも基礎的研究がうたわれております。

次に、本研究会を魅力的なものにするには、優れた一般演題の増加をはかると共に断層映像に関する網羅した教育講演に重きをおくことも大切ではないかと考えます。今回の研究会でも教育講演についての評価が高かったことを伺っております。さらに、本研究会は各種modalityの有用性と限界、臨床での選択性について検討する最もよい場であろうと思います。本研究会の発展的解消を云われる方もおりますが、未だ果たすべき役割は数多く残されており、今後益々増えていくものと考えます。衆知を合わせて今後の発展を積極的に考えていくべきだと思っております。

(杏林大学医学部放射線医学教室教授)